

## 地域を基盤としたソーシャルワークにおける対人支援理論の活用

### — 予防的支援に向けて —

○ 日本社会事業大学専門職大学院 木戸 宜子 (3228)

キーワード：地域を基盤としたソーシャルワーク、予防、ソーシャルワーク理論アプローチ

### 1. 研究目的

福祉ニーズが増大、複雑化している今日、介護予防や虐待防止、孤立予防、自殺予防など、早期にニーズをキャッチし対応する予防的活動が注目されてきている。またそのための対応として多側面からの連携協働体制を重視した、地域を基盤としたソーシャルワークの展開が求められてきている。しかしながら対人支援の指針ともなるソーシャルワーク理論モデル・アプローチの活用のあり方は、人々の抱えているニーズや課題に焦点をあてるという特性上、起こっている問題への対応に留まっている。地域を基盤としたソーシャルワークにおける予防的機能を発揮させるためには、今日の日本の福祉実践状況を見据え、さらなる応用化を図る必要があるのではないか。それには予防活動とソーシャルワーク理論モデル・アプローチの連動性、またマイクロ～メゾにおける視野の拡大及び焦点化などについて検討し、理論の活用性を高める必要がある。

予防に向けたソーシャルワーク理論アプローチの活用にあたっては、アセスメントや支援目標の用い方の変更が必要となる。また個別支援というミクロ的視点から、組織や地域というメゾの視点に移行、展開するには、個別支援において得られた知見を集約する必要があると考える。そこで本発表では、ソーシャルワーク理論アプローチ各々の特徴について、予防活動の枠組みにおける位置づけを考察し、その連動性、視野の拡大及び焦点化のあり方を探ることを目的とする。

### 2. 研究の視点および方法

本研究の視点としては予防活動の枠組み（G.カプラン）に注目し、ソーシャルワーク理論モデル・アプローチを取り上げ、文献研究を行う。G.カプランの予防活動の枠組みは連続性を示しており、地域レベルでの問題発生を減少をめざす第一次予防、発生した問題に対する早期発見・早期介入を図る第二次予防、介入後の機能維持や生活維持を図る第三次予防となっており、マイクロからメゾに向けた地域を基盤としたソーシャルワークのねらいと照合することが可能である。その中で治療・生活・ストレングスのソーシャルワーク理論モデルと、10のアプローチの各々の特徴を示す概念、アセスメント、支援目標に焦点をあて、予防の枠組みにおける位置づけを考察する。

### 3. 倫理的配慮

本研究は文献研究を行うものであり、参考文献、引用文献の扱いについては日本社会福祉学会 研究倫理指針に基づいて研究を行った。

#### 4. 研究結果

ソーシャルワーク理論モデル・アプローチのもつ視点について、予防活動の枠組みに基づいて整理してみたところ、次のような特徴が明らかになった。

ソーシャルワーク理論アプローチごとにみる支援期間には短期から長期までの幅があり、どのアプローチを選択するかによって、予防活動におけるねらいや効果に相違が生じることになる。アプローチの歴史的発展過程においては、多くのニーズに効果的に対応するために、危機介入などの短期的なアプローチの開発が進んできたという背景がある。短期的なアプローチの活用は、予防活動の枠組みの中では、第二次予防の初期の段階で早期介入を図り、問題状況の複雑化を防ぐ意味がある。また心理社会的アプローチなどの長期的なアプローチの活用は、第二次予防の段階での問題対応に始まり、第三次予防としての中長期にわたる継続的支援の意味がある。

個別支援過程における支援目標の設定については、問題解決からサポート、エンパワメントへと移行してきている。これは早期発見や介入という第二次予防に集中していた対応が、継続的支援としての第三次予防、そして人々のもつ力を強化することによって問題発生の減少をめざす第一次予防へと移行してきていることになる。それにはソーシャルワークに関わる多くの問題が取り除いたりなくすことが難しく、それらを抱えて生活する人を支えることに目を向ける必要があるために、生活モデルやストレスモデルが導入されてきたという背景がある。問題解決という支援目標を設定した場合には、問題そのものや原因となるものに直接的に働きかけることになるが、サポートやエンパワメントの場合には、人のもつ力や強みに働きかけることによって成長や発達が促され、結果として問題の軽減を図ることになる。

またソーシャルワーク理論モデル・アプローチは個人のみならず、個人をとりまく社会、環境へと視点を拡大してきている。これは地域レベルでの対応を図る第一次予防に目を向けてきていることになる。それには人と環境との相互作用に焦点をあてたシステム論的思考、生態学的視点が導入されてきたという背景がある。相互作用を焦点化した場合には、個人に生じた問題への対応、継続的支援をとおして得られた成果を集約し、地域の予防体制づくりに役立てることにより、問題発生の減少を図ることになる。

#### 5. 考察

予防の一般的な考え方としては、問題が生じないように、未然に防ぐこととされるが、地域を基盤としたソーシャルワークにおける予防活動の展開としては、選択されたソーシャルワーク理論モデル・アプローチと予防活動の効果には関連性があり、予防的支援目標の達成に向けては円環的な支援過程をたどる。またそのような個別支援における予防成果の集約により、地域の予防体制づくりを図る方向に向うといえる。